Hannah Whittaker,

Insurgency and Counterinsurgency in Kenya: A Social History of the Shifta Conflict, c.1963-1968.

Leiden: Brill, 2015, 176pp.

楠（くすのき）　和樹（かずき）

Ⅰ

半世紀以上続いたイギリスの植民地支配からケニアが解放され，独立を果たしたのは，1963年12月12日のことである。それからわずか16日後の12月28日，ケニア政府は北部辺境県（Northern Frontier District: NFD）と呼ばれていた北部の領域に対して非常事態宣言を発令した(注1)。NFDは，全体的に降雨量が少なく乾燥しており，ソマリやボラナ，レンディーレなど牧畜をおもな生業とする人びとが遊動的な生活を送っていた地域である。植民地期を通して周縁的な立場に置かれていた彼らは，「大ソマリア」（Greater Somalia）の理念を掲げるソマリを中心として，ケニアから分離して隣国のソマリア共和国と統合することをめざす政治運動を展開していた。このときに出された非常事態宣言は，警察署や軍駐屯基地を襲撃したり要人を暗殺したりするなど，過激な行動をとっていたシフタ（*shifta*）と呼ばれる分離派を取り締まることを目的としたものである。しかし，非常事態宣言下で導入された強権的な法令の影響を受けたのは狭義のシフタだけではなく，多数の牧畜民も財産や移動の自由を奪われ，暴力の対象となった。本書は，未だに先行研究の少ないこのシフタ紛争に関する社会史的な著作である。以下では，本書を構成する7つの章の内容を紹介したあとで，本書の意義について述べる。

Ⅱ

序論に当たる第1章は，本書の理論的な背景の説明に充てられている。ここでは，東アフリカ牧畜民研究，アフリカ境界領域研究，そしてマウマウ内戦研究などの関連分野の先行研究が整理される。そのうえで，本書の全体に通底する2つのテーマが提示される。つまり，シフタによる暴動を多層的な現象として捉える必要があるということと，ケニアの国家形成は暴動の鎮圧を通じて進められたということである。さらに，暴動とその鎮圧について，ミクロ・レベルからマクロ・レベルまでの多様な行為者間の相互作用に着目しながら論じるという，本書の基本的な方向性が示される。

第2章「NFDの分離をめぐる政治――1960～63年――」では，紛争の前史が，具体的には独立を目前にした時期のNFDにおける政治運動の展開が取り上げられる。1960年頃からケニアの独立に向けた交渉が本格化すると，北部地域ではさまざまな政党や政治団体が活動を開始し，その地域の将来的な帰属に関する主張を唱えるようになった。なかでも，北部州連合協会（Northern Province United Association: NPUA）や北部州人民同盟（Northern Province Peoples National Union: NPPNU）は，NFDは独立後もケニアに残留すべきだと主張した。この2つの政党は，NFDでは少数派のガブラやブルジなどの民族集団を中心としており，独立後の新体制下でインフラが整備され，雇用や教育の機会が提供されるように政府にはたらきかけていた。他方で，北部州人民進歩党（Northern Province Peoples Progressive Party: NPPPP）などの政党は，ケニアからの分離とソマリア共和国との統合を呼びかけていた。NPPPPはNFD全体の利益を代弁することによって，ソマリ以外の牧畜民からも支持を獲得することに成功したものの，独立の期日がせまるにつれて穏健派と過激派に分かれていった。結局，ボラナ出身で残留派の地方行政官と首長が過激派によって殺害されるという事件が発生するなかで，NPPPP内の民族間・個人間の対立関係が顕在化し，分離派の運動自体も弱体化していった。このようにして，別様でもあり得たNFDの政治的な可能性は閉ざされ，植民地期に設定された国境線が独立後も

そのまま維持されることになった。

第3章「シフタについて」では，「シフタ」と呼ばれた集団がどのような人びとによって構成されており，その背景にどのような動機があったのかが，行政文書に加えて聞き取り調査から得られた資料の検討をもとに考察される。シフタの大半を占めていたのは，それまで家畜の放牧に従事していた就学経験のない若い男性たちであった。彼らのシフタへの参加は，「大ソマリア」の創出という民族主義的な理念以外にも，放牧地や交易の機会をめぐる異なる民族間やクラン間の競合関係で優位に立つという，特定の集団の利益によって動機づけられていた。そのため彼らは，ケニア北部からソマリア共和国に逃れた政治家や首長が結成した北部辺境県解放戦線（Northern Frontier District Liberation Front: NFDLF）によって武器や訓練の機会を提供されていたものの，組織として統率されていたわけではなかった。さらに本章では，シフタにみずから加わらなくとも食料や衣服，情報などを提供することでその活動を支援したり，逆に弾圧する側にまわることを選んだりした人びとの事例が検討される。分離派の理念に共感しつつも生活の安定を優先して下級行政官職に留まった男性のケースのように（p. 65），シフタへの参加や支援の選択が特定の集団的，個人的な利益やローカルな社会関係によって左右されていたという点は，本書の重要な指摘である。

次の第4章「シフタ紛争――1963～68年――」では，紛争の内実に焦点が当てられる。シフタが当初襲撃のターゲットにしたのは，警察署や軍駐在基地などの施設や，残留派の首長であった。しかし，ソマリア共和国からの武器の流入が減少するにつれて，対立する民族間の家畜略奪や放牧地をめぐる衝突など，分離派の本来の理念とはほとんど関係のない活動が中心となっていった。さらに，シフタとそれに対する政府の鎮圧活動が続くなかでNFD内の治安は悪化し，民族間の対立が先鋭化していた。このようにシフタ紛争は，分離派の民族主義的な活動と資源をめぐるローカルな衝突の絡みあいとして特徴づけられるのである。

つづく第5章と第6章では，シフタに対するケニア政府の対応が描かれる。まず第5章で取り上げられるのは，シフタによる暴動の鎮圧を目的とした軍事的・治安維持的手段である。非常事態宣言の布告後，NFDでは治安維持法（Preservation of Public Security Act）によって北東地方治安条例（Public Security〔North-Eastern Region〕Regulations）という強権的な法令が導入された。この条例によって，ソマリアとの国境沿いの5マイル地帯に許可なく侵入した者は逮捕され，最大で28日間拘留されることになった。この条例が翌1964年9月に改正されると，NFDとその周辺地域において犯罪の疑いのある者を令状なしに逮捕し，その家屋を破壊し，家畜を没収するという広範な権限が治安部隊に付与された。さらに，政府は一般市民のあいだに諜報網を張りめぐらせ，出頭した者には恩赦を与えることによって，シフタの支持者とその鎮圧に協力する者の差異化を図った。と同時に，治安部隊にとってシフタとそれ以外の人びとを判別するのは困難だったことから，後者も集団的懲罰の対象に含めるとともに，牧畜という生業自体を犯罪と見なした。政府は人びととその家畜の移動を制限し，集団的懲罰を適用することによって，シフタの活動の鎮静化に成功したのだが，これらの施策はそれ以外の点においても重要だった。すなわち，「ケニア政府による暴動鎮圧戦略の核心は，それまで［ケニアの］中央政府が周縁的な領域としてみなしてきた地域に国家の支配を拡げ，確立するという試みであった」（p. 105）のだ(注2)。

第6章は，ケニア政府がシフタ対策として導入した集村化（villagization）政策を扱っている。1966年6月，政府はNFD内の28カ所に集落を設置し，住民に移住を求めた。その表面上の目的は，一般市民をシフタの敵対的な行為から保護するとともに，医療や教育などの基本的なサービスを提供することで開発の拠点を形成することにあった。しかし，財源不足のために集落では約束された開発計画がほとんど実施されず，人びとは治安部隊による日常的な暴力にさらされた。このことは，集村化政策の真の狙いがシフタとそれ以外の人びとを物理的に引き離し，前者の移動を効果的にコントロールすることのほうにあったことを示唆している。興味深いことに，これらの集落はマウマウの内戦時にキクユなどのアフリカ人が拘留された収容所をモデルとしていた。実際，集村化政策を支持した有力政治家の一部にはこれらの収容所に囚われていた経験があり，現地でこの政策を実施した行政官や軍司令官のなかには，

マウマウの鎮圧に従事した者が含まれていた。著者が指摘しているように，独立後のケニアの担い手となったエリートたちは植民地政府の統治実践を内面化していたのである（p. 125）。

シフタの活動は次第に下火になり，政府は1967年11月に鎮圧作戦の終了を決定した。非常事態宣言の発令からそれまでは4年弱しかなかったことになるが，一連の出来事の影響は現在まで尾を引くことになった。「余波」と題された第7章は，この長期的な影響について考察したものである。第1に，シフタ紛争が収束する過程でNFDのケニア国家への包摂が進んでいった。その結果，牧畜民は従来とは異なり水場や放牧地などの自然資源だけではなく，国政における代表を求めて争うようになり，民族間の衝突が激化した。第2に，牧畜民は紛争後も暴力の遺産に向き合うことを強いられた。多くの人びとが家畜を失って貧困化し，元の生活に戻ることができずに家畜の略奪や野生動物の密猟に従事したり，農耕と定住を中心とした生活に切り替えたりした。さらに，非常事態時に導入された種々の法令が1991年まで廃止されなかったことで，治安部隊によるハラスメントは日常化した。そうしたなかで，1984年にワジアで起こったワガラの虐殺（Wagalla Massacre）をはじめとして，ケニア北部では凄惨な事件が相次いで引き起こされた。これらの事態は，現在までつづくこの地域の周縁化の文脈を形成している。

最後に終章では，本書の内容を簡単に振り返るとともに，アフリカ紛争研究やアフリカ境界領域研究といった分野における本書の意義を強調している。

Ⅲ

シフタ紛争について，これまでの研究では特定の地域の事例に焦点を当てるか，ケニア北部に関する政治史研究で部分的に取り上げるに過ぎなかった。それに対して本書は，牧畜民による紛争の経験の多様性を明らかにしただけでなく，紛争の展開を国家レベルの動態とローカル・レベルの動態のあいだの相互作用として説明している点に，その特徴を求めることができる。このような議論の方向性を可能にしたのは，シフタにさまざまなかたちで関与した人びとから得られた口述資料と，近年公開されたばかりの文書――イギリス国立公文書館のいわゆる「移送文書群」（migrated archives）の一部――を含む行政資料を併用するという，方法上の選択であった(注3)。口述資料が集められた場所にやや地域的な偏りがあるのは残念だが，本書のもとになった現地調査が実施された時期のこの地域の治安状況を勘案すれば，その点は致し方ないところである。この意味で，本書はシフタ紛争に関する最初の包括的な社会史研究として位置づけることができるだろう。

ケニア北部は，現在も政治的，経済的に周縁化された地域である。さらに，ソマリアからケニアに流入した難民の問題が長期化し，イスラーム過激派の組織が商業施設や大学などを襲撃する事件が発生するなかで，ケニア国内でソマリの人びとが全体として他者化され，排外主義的な感情を向けられている(注4)。一方で，政府が近年ケニア北部で大規模なインフラ開発計画に着手していることから，この地域の将来的な展望について楽観的な声も聞かれる（pp. 152-153）。この10年ほどのあいだに，本書と同様に独立後のケニア北部における周縁化と暴力のテーマを扱った論考が相次いで発表されているとはいえ［Bloch 2017; Branch 2014; Lochery 2012; Weitzberg 2017］，その実態が十分に明らかにされたと言うことはできない。この地域が今後どのような未来を迎えることになるにせよ，本書がその一端に照射したところの「現在の過去性」（the past of the present）［Cooper 2002］――アフリカにおける現在はどのような意味で過去なのかという問い――について，引きつづき検討する必要があるだろう。

（注1）ケニア北部でNFDが行政区分として存在したのは，1910年から1925年までの期間である。1925年には北部辺境州（Northern Frontier Province）に変更され，その後も何度か改称されている。この書評では，本書を含むケニア北部の歴史研究と同様に，煩瑣を避けるために行政区分としてのケニア北部を指すときには時期を問わずNFDの語を使用する。

（注2）　引用中の角括弧は，評者による補足である。

（注3）「移送文書群」の概要と，それをめぐるイギリス帝国史研究の議論について，Sato［2017］を参照。

（注4）　ケニアにおける近年のソマリ問題を整理した論考として，津田［2012］を参照。

文献リスト

〈日本語文献〉

津田みわ 2012.「ケニアからみたソマリア問題」『アジ研ワールド・トレンド』(205) 30-32.

〈英語文献〉

Bloch, Sean 2017. "Stasis and Slums: The Changing Temporal, Spatial, and Gendered Meaning of 'Home' in Northeastern Kenya." *Journal of African History* 58 (3): 403-423.

Branch, Daniel 2014. "Violence, Decolonisation and the Cold War in Kenya's North-Eastern Province, 1963-1978." *Journal of Eastern African Studies* 8(4): 642-657.

Cooper, Frederick 2002. *Africa since 1940: The Past of the Present*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lochery, Emma 2012. "Rendering Difference Visible: The Kenyan State and Its Somali Citizens." *African Affairs* 111(445): 615-639.

Sato, Shohei 2017. "'Operation Legacy': Britain's Destruction and Concealment of Colonial Records Worldwide." *Journal of Imperial and Commonwealth History* 45 (4): 697-719.

Weitzberg, Keren 2017. *We Do Not Have Borders: Greater Somalia and the Predicaments of Belonging in Kenya*. Athens: Ohio University Press.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員)